

第24回

若手研究者交流会

2014年

日時:

6月23日(月)

18:00~19:00

場所: **臨床小講堂**

発表者:

微生物学教室

多田納 豊 先生

Department of Microbiology and Immunology

Dr. Yutaka Tatano

『非結核性抗酸菌についての基礎的研究』

The basic research on nontuberculous mycobacteria

教員(助教~准教授)、職員、大学院生、学部学生等、
どなたでもご参加いただけます

連絡先: 若手交流会世話人

山崎雅之 (環境予防医学)

原伸正・日吉峰麗 (代謝生化学)



2014..6.23 (Vol.24)

非結核性抗酸菌についての基礎的研究

多田納 豊

微生物・免疫学講座（微生物学）

Mycobacterium avium complex (MAC) 症をはじめとする非結核性抗酸菌 (NTM) 症は、主に AIDS 患者や高齢者、肺に基礎疾患を有する人といった易感染宿主に発症することが多い。ところが、近年我が国では、基礎疾患を持たない中高年女性を中心に、一次感染型の小結節・気管支拡張型肺 MAC 症の増加が問題になってきている。MAC は、多くの抗菌薬または抗結核薬に抵抗性を示し、長期化学療法をもってしても、治療に難渋する場合が多い。そのため、MAC に対して有効な新規化学療法剤の開発が切望されているものの、遅々として進んでいないのが現状である。このような状況下においては、現行の抗菌薬の効果を押し上げる様な免疫補助剤は、有効な治療レジメンの確立に向けての一助になるものと考えられる。

感染宿主からの結核菌や MAC をはじめとする抗酸菌の排除には、細胞性免疫、中でも、Th1 細胞、NK 細胞あるいはマクロファージ自身により産生される種々のサイトカインによるマクロファージの殺菌力の活性化・増強が必須である。一方、抗酸菌は、マクロファージ殺菌メカニズムに対する種々の抵抗性に関わる病原因子を発現しており、これによって細胞内での持続的生残・増殖が可能となる。

したがって、MAC 感染時の免疫応答やマクロファージの殺菌メカニズム、更に、これらの免疫応答に対抗し病態形成に関与する MAC の病原性を明らかにすることが、上記のような免疫補助剤の候補を見出す上で非常に重要であると思われる。

今回は、MAC に対するマクロファージの殺菌機構、および MAC 感染時の感染制御機構に関する教室の研究内容を含め、発表させて頂く予定である。